

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第977号 平成27年8月7日

戦後70年（1）

今年は、戦後70年という節目の年に当たります。

安倍総理がどのような談話を出すのかも含め、マスコミは連日のように戦後70年を取り上げ報道しています。

70年という年月は、人間の一生でいえば「古希」と表現されるように、その時間の集積は極めて重たいものです。特に、我が国は私を含め戦争を知らない世代の人間が大半を占める状況となっており、こうした中で、戦後70年という節目に、日本という国が今後何処に向かって進もうとしているのかを国の内外に示す事は、極めて重要であり、国民一人一人がしっかりとこの問題に向き合わなければなりません。

ただ、我が国がこれからの道筋を示し、それが、他国の理解と共感を得るためには、我が国の戦前から戦後の振り返りと、その事を踏まえた上で、今後如何なる道を選択しようとするのかを、国内外に明確に示す必要があります。

我が国が、戦後70年を超えて、これからどのような道を選択すべきかという問題は、日本がかつて引き起こした戦争とは何だったのか、また、その責任は何処にあるのかという問題と密接不可分の関係にあります。安倍総理がどのような談話を出すかが注目されていますが、我々が注目しなければならない事は、単に談話における言い回しではなく、発言の文脈に含まれている真意が何なのか、日本国内だけではなく国際社会からも厳しく注視されているという事です。その意味で私達は、戦後70年に当たって出される談話に注目するだけではなく、私達自身が、あの戦争とは一体何だったのかについて考えて行く必要があるのではないのでしょうか。

そもそも、日本人の多くは8月15日を終戦記念日といい、その日から戦後が始まったと考えていますが、本当に戦後は8月15日からスタートしたといい切れるのでしょうか。

ここで、8月15日以降の大まかな流れを見て置きたいと思います。

- 1945年（昭和20年）8月15日、昭和天皇のポツダム宣言受諾の玉音放送が流される。
- 同年9月2日、米艦ミズリー号で当時の外務大臣重光葵氏等が降伏文書に署名する。

・同年9月5日、日ソ戦の終結

・1951年（昭和26年）9月8日、サンフランシスコ平和条約の締結。これによって、日本は国際社会への復帰を果たす。

という経緯からすると、8月15日は、日本が一方的に戦争を止めると宣言しただけで、本当に戦争が終わったといえるのは、9月2日と考えるのが相当ではないでしょうか。

また、占領状態からの解放という意味で捉えるなら、9月8日（若しくは、サンフランシスコ平和条約が発効した翌年の4月28日）を以て戦争が終結したと考える事も出来るでしょう。

天皇がポツダム宣言を受諾したので戦争が終結したというのは、日本の内側から見た発想であり、それが敗戦ではなく終戦という曖昧な表現に繋がっているように私には思えます。

日本は、連合国側と4年近くにわたって戦い、その結果、日本人だけでも300万人以上の犠牲者を出し、ポツダム宣言の受諾によって「無条件降伏」したという冷厳な事実から目を背けてはならないと思います。

作家の里見 弴氏（1983年、94歳で没）は、昭和22年に「無条件降伏」という一文を残しています。里見氏は、8月15日の出来事を「終戦」と呼び「無条件降伏」と呼ばない事に相当お怒りだったようで、そうした当時の風潮に対して次のように述べています。

（前略）

「無条件降伏」という言葉を口にする度毎に、敗戦当時の悔しさが思い出され、日本再建の意思が強まるというような、そんなしみったれた功利主義からこれを提唱するわけではない。事実を事実として、はっきり認識し、正確な言葉で言ひ現す心の張りくらいはもつべきだ、との主張に出づるものだ。戦闘行為が熄んでいる状態と終戦との区別もつかない無知蒙昧の民、得手勝手なでたらめをいって、以て自ら寛^{ゆる}うする、お坊っちゃん気質の民、無条件で降伏した事等、忽ち忘れ去って顧ようともしないぐうたら民、そんな野蛮人には墜ちたくない、というのだ。

（以下略）

結構厳しい物言いですね。

日本人は、何事も黑白を明らかにする事を避け、曖昧なままにして置く事が好きといわれますが、里見氏の指摘はそんな日本人に対する警鐘と受け止めるべきでしょう。

また、敗戦を終戦という日本人の曖昧さは、戦争責任に対する認識の甘さにも通じるものがあります。

戦後登場した東久邇内閣は、国民に対して「一億総懺悔」という言葉を使いまし

た。

戦争は、自然発生的に始まったものではありません。国家を戦争不可避な状況へと導いて行った国家指導者、暴走した軍の指導者、更には、国民を煽ったマスコミ等、戦争には、そこに至るまでの経緯の中で、責任ある判断や行動をした者がいたはずですが、「一億総懺悔」という言葉によって、結局は、誰の責任も問わないという事態に陥りました。

太平洋戦争は、「日本の生き残りを掛けた止むを得ないものだった」、「自衛のための戦争だった」という主張があります。確かに、経済封鎖によって国家存立の危機に陥った日本が、資源確保を目的に局面打開に打って出たという側面はありますが、しかしそこに至るまでには、満州国の建国等によって自ら国際的に孤立化への道を進んで行った事も見落としてはならないと思います。

欧米列強に伍して日本の権益を確保しようとしたのは、その時代においては止むを得ない選択であったとしても、日中戦争は泥沼化し、国家財政も破綻に瀕している中、継戦能力が圧倒的に劣る日本が、アメリカやイギリスと戦争をするというのは全くの無謀としかいいようがありません。にもかかわらず、日本がアメリカやイギリスを相手に戦端を開いたのは、国際社会に対するインテリジェンスの欠如と根拠なき楽観主義のなせる技という他ありません。

戦争は、絶対してはなりません。しかし、日々変化する国際情勢の中で、戦争反対を叫んでいるだけでは戦争を回避する事が困難である事は明らかです。

自国の安全は自ら守るという強い意志と、備えは必要ですが、それと同時に（いや、それ以上に）我々が考えなければならない事は、国際社会の中で孤立する事の無いよう、我が国に対する信頼を一層高めて行く必要があるという事です。そのためにも我が国は、これまで以上に、国際平和に主体的な役割を果たして行くよう努力すべきではないでしょうか。

（塾頭 吉田洋一）